

# 名古屋の古道・街道

池田 誠一

## 【5】木曾街道…清水口から御用水へ

### 1 藩の道

現在の道路は、国道、県道、市道などと区別されています。江戸時代には五街道など国道ともいえるような道路がありましたが、その他の道路はどうなっていたのでしょうか。

各地の詳しい状況は分かりませんが、各藩や代官所で必要な道路を定めて管理していたようです。尾張藩では次の三本の道を五街道並に管理していました。

- ①木曾街道(城下から中山道、木曾へ)
- ②岡崎街道(城下から東海道、岡崎へ)
- ③岐阜街道(城下から岐阜へ)

それぞれに宿場を設けて伝馬制度を採ったばかりでなく、一里塚や松並木も造っていました。

藩の道が必要とされたのにはいくつかの理由がありました。①の木曾街道は基本的には城下から中山道に出る近道として設けられました。中山道を江戸に向かうには美濃路では遠回りです。しかしそのルートが犬山廻りになったのは、中山道に出るのに最短だからとか、尾張藩の領地だけを通って行けるからとか、あるいは家老、成瀬家の居城の近くを通るからとか、いくつかの見方ができます。(図1)

この街道は1615年、木曾地方とその山林が尾

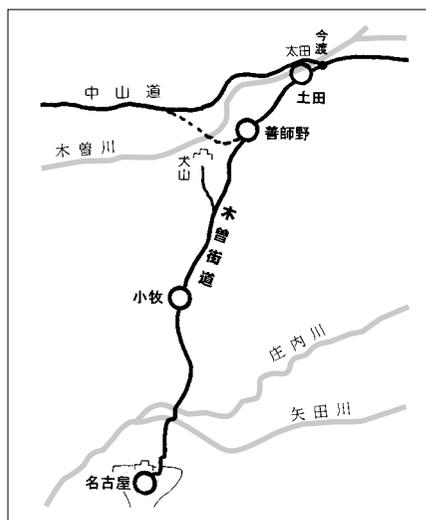


図1 木曾街道

張藩の領地になって、にわかに必要なが高まることになりました。

### 2 名古屋と木曾とを結ぶ道…木曾街道

#### (1)尾張藩の公用道

道にはいろいろな名前が付けられます。「木曾街道」は藩の公用道としての呼称であり、ライバルの善光寺街道が下街道と呼ばれたのに対して「上街道」、「本街道」と。また途中の地点を

指して、「犬山街道」、「稲置街道」(犬山は一時稲置村でした)、「小牧街道」と。さらに通った人から「殿様街道」、「御成道」、「成瀬街道」などもよばれることがありました。

木曾街道の起点は本町通と伝馬町筋の交点、名古屋宿の伝馬会所の置かれていたところです。そこから城下の五口の一つ、志水口(清水口)を通過して北に向かいます。

矢田川、庄内川を渡り味碗を北に、春日井市をかすめて、小牧に宿場がつくられました。街道は北に向かい、楽田追分で左に犬山への道を分けます。そして江戸初期まで中山道だった道に入り、善師野宿、土田宿を通過して、太田の渡しの近くの今渡で中山道に合流しました。

この街道は義直の命を受けて家老の成瀬氏が1623年に完成させたもので、宿駅制度ができたのは1634年になります。小牧、善師野、土田の3宿で、人馬の継立ては25人25疋と美濃路、佐屋路の半分でした。

藩主が参勤交代などで利用したり城下と犬山や木曾地方を結ぶ道として、藩政にとっては大変重要な道だったといえます。

## (2)名古屋の木曾街道

この街道の起点は、伝馬制度からいうと、前述のように美濃路の名古屋宿(本町通伝馬町)になります。しかし、藩の公用道としての出発点は城であり、実際上のスタートは城下の五口の一つ、志水口だったと考えられます。

志水口からは北に坂を下り街道特有の屈曲の後、また北に進みます。清水の集落を抜け、御用水を渡し、安井村へ。昔はここに矢田川が流れていました。次の成瀬寺村は少し迂回しつつ庄内川を渡し、味碗から北に小牧宿へと向かいました。(図2)

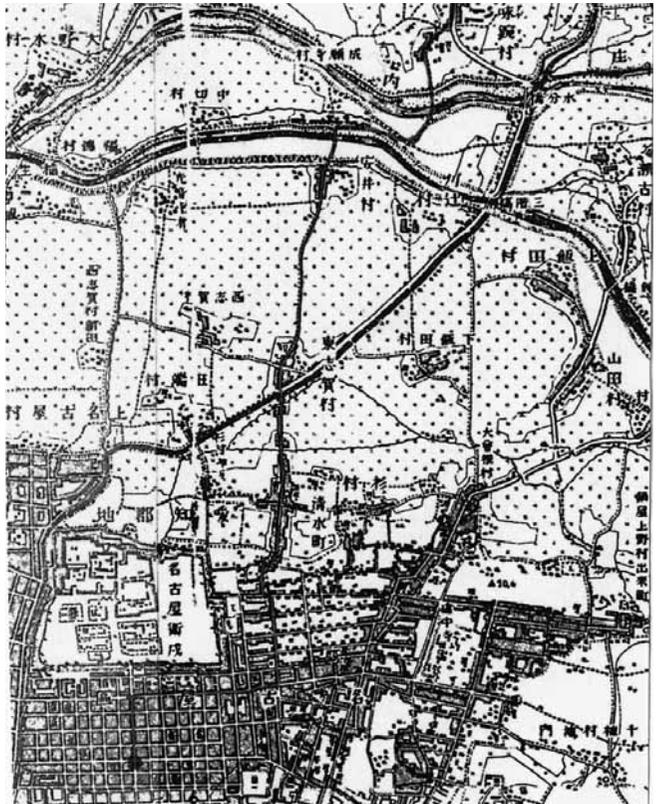


図2 市内の木曾街道(明治21年)

## 3 清水口から御用水をこえて

さて、名古屋の中の木曾街道を歩いてみましょう。スタートは、今の清水口(北区)になります。昔の街道は交差点のすぐ西の道を北に入り



志水の下り坂

ます。この辺りに志水の木戸がありました。

坂は少し行って右に曲がります。清水口の名になった清水は、このあたりの地形から見て台地の水が地下水となって出ていたのではないのでしょうか。道は国道にぶつかります。迂回して東側に移ると、街道は下りつつ北向きになって、清水の町に下っていきます。

\*

少し街道らしくなった道を行くと名鉄の瀬戸線をくぐります。白龍酒造を通りすぎて右に入ると久国寺があります。この辺りは名古屋城の鬼門の方向にあたるため、鬼門を守る社寺があります。この寺も1600年に創建されましたが、当地に移り鬼門除きの寺とされました。門を入った右に鐘楼がありますが、岡本太郎の作った“角”のいくつも出た珍しい梵鐘です。

街道に戻ると、左手に八王子神社があります。この神社も、古くから城内の位置にあったもので、築城の際鬼門の守りとしてこの地に移されました。神社を出た北の三角地には稲置街道の碑が建てられています。

そこから西に百餘の所に解脱寺があります。この寺は1657年家老の成瀬正虎が江戸から竹天和尚を招いて薬師堂を建てたのに始まります。和尚は俳諧に長じ、1688年には芭蕉がここを訪ねて滞在し、

粟稗に 貧しくもあらず 草の庵  
を詠みました。その石碑が門の正面にあります。発句の場所にある句碑として貴重なものです。街道は緩やかにカーブしつつ北に向かいます。



久国寺、角のある岡本太郎の鐘



八王子神社と木曾街道

\*

少し進んだ左手、清水小学校を通り過ぎた所の道には昔は小さな川が流れており、西行橋と呼ばれる橋がかかっていました。尾張名陽凶会には、この橋が捨橋ともいわれ、子供を捨てた真似をするとその子は無病・長寿になると言い伝えられていると記されています。水路は時代とともに下水に変わり、川的位置すら分からなくなりました。

街道を少し進むと黒川の手前で斜めに真直ぐな道路と交差します。ここには昔御用水と呼ばれる水路が流れていました。この水路は1663年名古屋城の堀の浄化のために庄内川から取水したもので、一部は上水としても使われました。

すぐ黒川を渡ります。これは江戸時代、東の方から流れてくる大幸川を堀川につなぐ改修でできたものです。

広い幹線道路を渡った北側に、昔はその大幸川が流れていました。西に向かって流れて行く通りは、今は道路になっ



解脱寺の芭蕉の句碑

ていますが兒子八幡宮があります。

街道は、その神社を過ぎたあたりから区画整理によって一部途切れています。それを迂回しつつ街道はさらに北へ、安井村へと入っていきます。

## 4 公用道経営の難しさ

江戸時代の伝馬制度では、公用の利用者に便宜を与えるためには、宿場が一般の旅人や荷物で儲けられるというのが基本的な条件でした。

ところが木曾街道には古くからあった善光寺街道というライバルがありました。街道としての条件は、距離も高低差も利用の制約も善光寺街道の方が良かったのです。(図3) 従って、一般の旅人も荷物もそちらに流れてしまうのは当然でした。そのため木曾街道の宿場は、藩などからの様々な助成がありましたが、それでも維持が困難になってしまいました。

江戸時代を通して何回も、木曾街道の宿場は善光寺街道の通行の規制を働きかけ、藩も何度も規制をしました。しかし、いつのまにか元通りになっていたのです。理に反した公用道の維持は藩政にとっても大きな問題になりました。

二つのライバル道路、今は木曾街道が国道41号に、善光寺街道は国道19号になっています。

ファインダーの 道にも混じる 夏の服



昔、西行橋のあった辺り

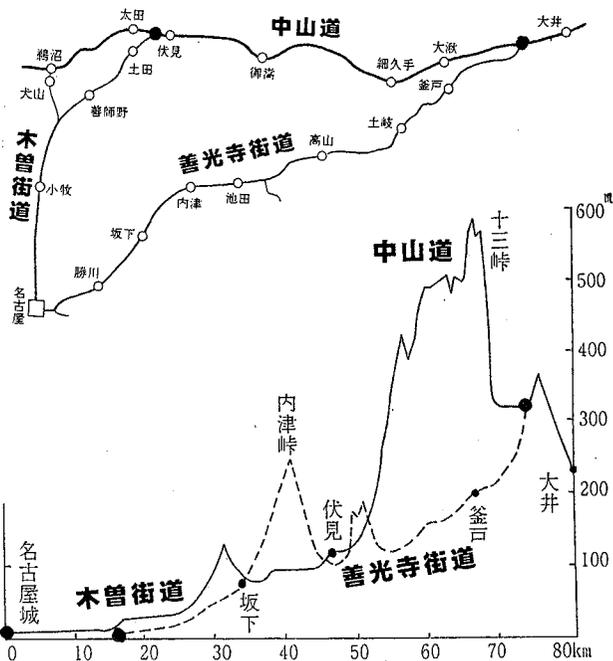


図3 木曾街道と善光寺街道(平面と断面)〈文献①より〉

<参考文献>

- ①桜井芳昭「尾張の街道と村」(1998)
- ②水野時二監修「北区誌」(北区役所1994)
- ③安藤直太郎監修「下街道」(春日井郷土史研究会1976)



街道と斜めに交差する御用水の跡



兒子八幡宮(左の道に大幸川、右の道が木曾街道)